

打ちこわしで米を撒くのはなぜ？ ～絵画資料を使った日本史の授業

千葉県立八千代西高校
柄澤 守

修学旅行でガマに20分ぐらい入っただけで怖いと思ったのに、戦争中の人たちにとってはガマから外に出るほうが恐怖だったのかなあと考えた。日常生活でいやなことや怖いと思うことが毎日のようにあるけど、命がある限りがんばらないと沖縄の人に失礼だと思った。毎日こういうことを考えていられないけど、本当につらいと思った時に、沖縄戦のことを思い出したいと思います。

宮良ルリさんの『私のひめゆり戦記』を題材にした授業をした後で、ある生徒が書いた感想文である。

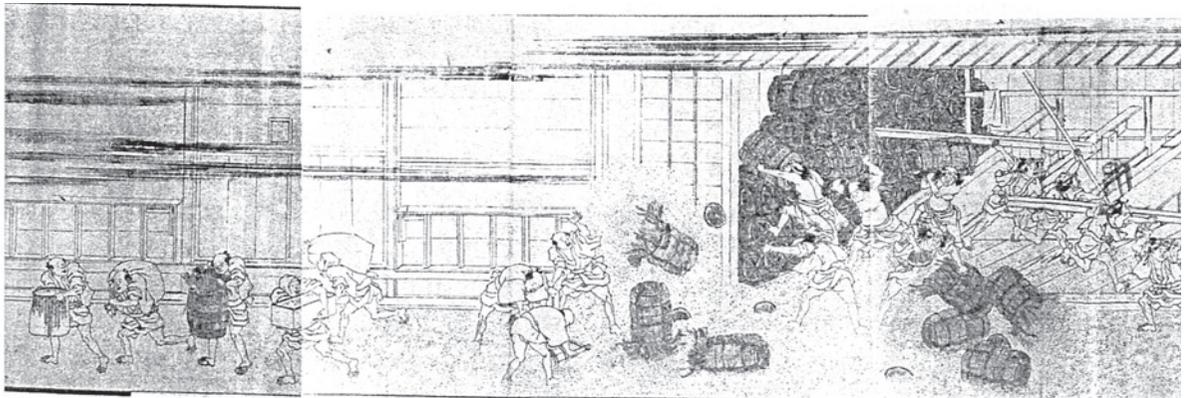
現在勤めている学校はいわゆる『教育困難校』だが、生徒たちは「教科書の太字」「入試に出る」などの余計なフィルターを通さずに物事をまっすぐ見ようとする。だから「毎日考えてはいられないけど」沖縄戦の学習は今を生きる自分たちにとって大切だと気づく。歴史を生きた人々の息づかいを素直に感じとっているのである。

今回は、絵画資料を手がかりにして、打ちこわしのねらいと民衆の願いを考えさせた授業を紹介したい。

1. 史料の紹介

『幕末江戸市中騒動記』は1866（慶応2）年に江戸でおこった打ちこわしを描いたものである。資料Aはその一部で、教科書や資料集にしばしば掲載される、米屋が襲われる場面である。『幕末江戸市中騒動記』は2つの部分で構成されている。前半は1866年5月の打ちこわしを記録したもので、米屋や呉服屋を襲う民衆の姿を生々しく描いている。そして後半は、同年9月におこった「お粥騒動」といわれる事件の様子が記録されている。この騒動は、民衆が大名家敷や商家に米などの施行を強要し、寺社境内で炊き出しをおこない貧窮者に配給したというもので、この時には大きな打ちこわしはおきなかった。

打ちこわしの直接の目的は米の強奪ではなく、買い占め米を商業上使用することを不可能にし、買い占めをおこなった店に対して制裁を加えることにあった。『幕末江戸市中騒動記』の別の場面（資料B）を見ると、家屋を破壊し、商品^{おしがい}を台無しにするために行われていたことがよくわかる。また打ちこわしの後には押買という安売り強要の行



資料A

動があることから、押買を成功させるための威嚇あるいは見せしめという意味もあったと考えられる。一般的には、打ちこわしの参加者と対象（米屋など）相互の関係は、居住地域周辺に限られるケースが多い。民衆は、飢饉などの際には米屋が顔なじみの居住者を救うために値引きに応じるべきだという観念をもっていた。当時はまだ買い手の事情を主張できる売買関係（振り売り商人と買い手の相対売買など）が主流であり、緊急事態においては、買い手が自己の事情を売り手に主張し、売買交渉をおこなうのは当然だったのである。

ところで、授業では東京国立博物館でコピーした図版を使用したのだが、詞書や脚注の類が一切ない。描かれた米屋がどこなのか気になったので博物館に問い合わせると、「巻物になっていますが詞書はありません。細谷松茂という作者がどういう人物なのかもわかりません。作成年代は画風から19世紀といわれています。『幕末江戸市中騒動記（騒動の図ともいう）』という名前は博物館に収蔵する際につけられたものです。」という返答であった。つまり、内容から推測して、慶応2年の江戸打ちこわしを描いたものであることはほぼ間違いのないものの、この絵がいつどういう意図で描かれたのかわからないのである。当然ながらこのシーンについても、どの米屋が襲われたのかは不明である。概説書や図説などに広く使われている絵画だが、史料としての価値を再確認する必要があるようである。

しかし、それでもこの絵は教材として魅力的である。中央に鉢巻をした打ちこわし勢が米俵をひき裂いてばら撒く様子が描かれ、右上には及び腰になっている米屋の人々、左右には騒ぎに乗じて覆面をして米を持ち去ろうとしている人々が生き

生きと描かれている。米屋を襲う＝米を奪うという常識的な判断をひっくりかえし、打ちこわしは何のために行われたのかを考えさせるには格好の素材である。また女性が一人しかいない、奉行所の役人が捕まえにきていない、長い棒や鉢巻は何を象徴するかなど、推理したくなるアイテムも豊富である。

2. 授業の様子

以下、Sは生徒、Tは教師の発言である。

発問1 この絵に描かれた人・物をよく見て、変だな・面白いなと思ったら、それを○で囲みなさい。

S「襲っているのに顔を隠してない」「左の隅に泥棒っぽい人がいる」「長い棒は何に使うのか」「女の人がある」「お米の値段が高いのに持って行かずに撒くのはもったいない」

過去に何度かこの絵を使った授業をしているが、毎回生徒たちの着眼点の面白さ・鋭さに感心させられる。

発問2 米屋を威嚇する人、米をまく人、米を拾う人、どこまでが仲間でしょう。

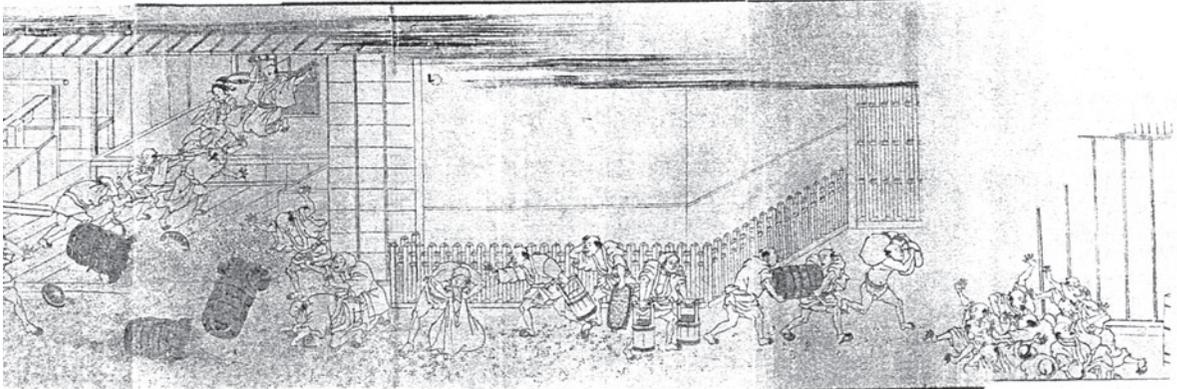
全員が打ちこわしのメンバーだと思っている生徒たちは「えっ？」と思う。柄澤がこう聞くからには「拾う人」は仲間ではないのだと推測する。

S「盗むのではなく撒くのが目的だから、拾っている人たちは仲間じゃない。」

T「何のために撒くの？」

S「拾うと泥棒だけ撒くことまでは犯罪にならない。」

T「米屋を襲った時点で犯罪じゃないの？」





資料 B

S「……」

次の発問につなげようとする私の罠にかかった。しめしめである。

発問 3 打ちこわしの目的は、米を「撒く」ことでした。いったい何のために撒いたのでしょうか。

この発問が授業のメインテーマである。難問だが、ここまで前フリをしておけば生徒たちも真剣に考えてくれる。

T「ポイントは覆面です。米を拾っている人は覆面で顔を隠しているでしょ。捕まりたくない、つまり悪いことをしているという自覚があるからです。でも真ん中のばら撒いている人たちは覆面してないね。悪いことだと思っていないんだね。なぜ撒いたんだろうね。」

S「集まった人たちに米をあげるため。」

T「かっこいいねえ。でも最初から分け与える計画なら盗んでいる人たちと同罪になるんじゃない？」

S「撒いたら、そこにいた人がたまたま拾ったって言い訳する。」

T「じゃあ、本当の目的は何だって突っ込まれたら何て答えるの？」

S「……」

T「ヒントをあげよう。実は襲われる米屋と襲われない米屋があったのです。襲われない米屋は……？」

S「値下げした米屋！」

T「この米屋は値下げしなかったんだね。つまり撒くのは下げなかったことに対するいやがらせなので。」

打ちこわしというと商慣行を否定する重大な行為だというイメージをもつが、実は「ご近所同士持ちつ持たれつ・困った時はお互い様」こそが江戸時代の商慣行であり、共同体を破壊するような異常な値上げ（ペリー来航以来米価は10倍になった）をした米屋の方が、慣行を否定したと人々は認識したのである。

T「ところで、この米屋さんはこの後どうなると思う？つぶれる、それとも営業を再開する？」

S「再開する。」

T「そう、再開するのですが、打ちこわしの前とちがっていることが一つあります。何だ？」

S「値段が下がっている。」

T「そこに〴〵面が割れている。打ちこわしをした人もまたお米を買いに行くんだね。仲直りだ。」

正確に言うと、打ちこわしの目的は商品の販売を不可能にすることであるから、つぶれてしまう店もあつただろう。しかし、ここでは打ちこわしの目的が値下げのための威嚇であることを強調したかったので、再開した場合にしぼって話を続けた。

T「もう少し説明しよう。たとえばみんなは1万円の携帯電話が10万円に値上がりしたら買いますか？“ド〇モこのやろう”って思うでしょ。しかもこの場合は必需品の米だ。誰もが値段が10倍になるほど不足するはずはないと思っているから、米屋

も店をめちゃくちゃにされる前に少し値下げしておけばよかったかな、と反省するのです。ただし、打ちこわし勢の行動が正しいと認められるかどうかは一概に言えません。百姓一揆もそうですが、捕まる場合も捕まらない場合もありました。」

T「大坂の打ちこわしでつかまった人が「おまえらのリーダーは誰だ」と聞かれた時に『大坂城にいます』と答えたそう。将軍家茂のことを指しているのですが、どういう意味かわかる？」

S「打ちこわしをしなきゃいけないのは、幕府が米の値段を高くして民衆を追いつめたから。」

T「みんな今日はさえてるね。“おれたちは打ちこわしをやりたくてやっているわけじゃない。幕府が外国と貿易を始めて、米の値段が10倍に上がったからだ」と。民衆が幕府を見限っていたからこそ、“これから長州戦争！”というタイミングで事件がおこるわけです。」

江戸町奉行所の前に『まつりごと売りきれ』という落書きがされたのも、幕府が見限られたことを示す事例といえよう。誰も目にも明らかな世直し状況が現出し、一方で薩長など討幕勢力があらわれた。勝敗は見えてきたのである。

3. 生徒の疑問から考える

この授業をすると生徒たちが必ずぶつかる問題が2つある。ひとつは、民衆は米の値段が高くて買えないのに、なぜばら撒いて使えなくするのかという疑問である。もうひとつは、米屋の法外な値上げはひどいにせよ、打ちこわしという行為はやはり犯罪ではないのかという点である。いずれも大きな問題なので、この授業だけで生徒たちが納得する説明をするのは難しい。むしろ生徒たち自身にじっくり考えさせたいテーマであり、長いスパンで解決できるような授業計画が必要であろう。私自身模索中ではあるが、打ちこわし勢と米屋の日常のつきあい、お互いの距離の近さを理解させることによって問題に接近できるのではないかと考えているので、前述したように「米屋は営業を再開し、打ちこわし勢と仲直りする」という説明を強調している。

ところで、今年の授業では「仲直り」の話をした時に思わぬ発言が出た。

S「撒いたお米を集めて売るんですね。」

私はぐっとつまんだが、「なるほど、生ものじゃ無理だけど、お米ならそういうこともあったかもし

れないね。」と返した。この生徒は「食べ物をばら撒くのはもったいない」→「集めて安く売れば無駄にならない」と考えたのである。撒いた米を再利用するという事実があるか確認しなければならないものの、発想のユニークさに感心した。と同時に、もしそういう事実があるなら、はじめから安売りをさせるための戦術だった可能性があると思いついた。そこで、打ちこわし研究で第一線に立たれている山形大学の岩田浩太郎教授にメールを送って、疑問をぶつけてみることにした。面識もない高校教師からの不作法な質問にもかかわらず、早速丁寧な返信をいただいた。それによると、「史料を見る限りは撒かれた商品が再利用された例は見当たらない。土砂と混じったりするだけでなく、さらにその上から醤油などもばらまいてグチャグチャにする場合がみられたり、あるいは井戸に米を放り込んだり、近くの川に投げ込んだりしているケースもよくある。これらの行動からみても、米を傷物にして安く売らせるということを念頭においているとは考えられない。」

残念ながら私の予測は証明されなかった。

しかし、撒かれた米を拾う民衆の姿が描かれているのは事実だから、こういう推測は成り立つかもしれない。民衆は砂が混じろうととにかく安く米を買いたい。この米屋がまた値上げしようとしたら「お前のところはどうぞ砂混じりの米を売っているんだらう」と難癖をつけて値上げを阻止しようとするだろう。これは結果的に打ちこわしの「成果」であり、一度成功すれば戦術として意識された可能性もあるのではないか。憶測の域を出ないかもしれないが、生徒の発言から楽しい勉強をすることになった。こういう発見ができるのも、彼らが絵画資料にひきつけられて積極的に授業に参加しているからである。生徒たちが歴史のワンシーンに入りこみ、「尊王攘夷派に政治は任せられないよ！」とか「打ちこわしてわがままじゃん！」と叫ぶのを聞くと、思わずにこにこしてしまう。課題は多いものの、彼らが歴史を身近に感じられる授業を積み重ねていきたい。

参考文献

千葉県歴史協日本史部会編『絵画資料を読む日本史の授業』（国土社）
青木美智男編『新視点日本の歴史5』（新人物往來社）
岩田浩太郎「打ちこわしと民衆世界」（『日本都市入門Ⅱ』所収）（東大出版）